姫路城の石垣

藤本啓二(石ころクラブ)　谷本晃(石ころクラブ)

はじめに

昨年5月、石ころクラブの定例会で顧問先山先生の案内の下、姫路城の石垣を見学した。当クラブでの石垣見学会は初めてであったが、石垣の積み方やその形状、さらには表面加工技術、石材石質などに時代的変遷があることを知り、とても興味深く見学することができた。姫路城の石垣については、過去から詳細なる調査研究が行われ、すでに多くの文献や調査報告書が存在する。詳細はこれら文献等に譲るとするが、石垣築造の歴史から垣間見る姫路城といった、いつもとは違う視点で姫路城の新たな魅力をご紹介できるのではないかという想いから、共生のひろばに「姫路城の石垣」として出展することとした。

石垣の分類とその変遷

姫路城では、天正8年(1580年)に羽柴(豊臣)秀吉が姫路城を改築したとされる戦国時代の石垣から、後の城主池田輝政、本多忠正らが改修した近世の石垣を経て、さらには江戸期から平成期に修復された石垣に至るまで、多彩な石垣を見ることができる。一般的に1600年の関ケ原合戦以後、築城に伴う石垣の築造技術が時代とともに発展したといわれ、姫路城もその例外ではない。秀吉は石垣に自然石や転用石を多用したが、以後石垣の積み方や石材の加工技術などに大幅な発展がうかがえるなど時代的変遷が認められ、姫路城における石垣築造の歴史は、現在以下のとおり5時期に区分されている。

時期	年代(西暦)	城主	石垣の積み方など
Ⅰ期	天正8年(1580)～ 慶長5年(1600)	羽柴秀吉	野面積み(自然石積み) 転用石の多用　算木積みの未発達
Ⅱ期	慶長6年(1601)～ 慶長14年(1609)	池田輝政	打込みはぎ　一部切込みはぎの出現 算木積みの完成　転用石の減少
Ⅲ期	元和4年頃(1618)	本多忠正	打込みはぎ及び切込みはぎ　石質規格性の高さ
Ⅳ期	江戸時代(～1867)	松平忠明ほか	*石垣の補強及び修理修復
Ⅴ期	明治(1867)～平成	--------	*石垣の修理修復

石材の産地と転用材

姫路城の石垣に使用された石材の多くは、姫路城が位置する姫山から数キロ以内の山々から切り出されたといわれている。なかでも石材の大半を占める凝灰岩類は、城北部の広峰山、増井山、砥堀山ほか、城南部の鬢櫛山が産地とされ、このうち増井山東麓や鬢櫛山には矢穴が残された石材が現存する。その他の石材については、花崗岩類が城西部の青山、山田峠付近、チャートが姫山、手柄山、八丈岩山、砂岩は景福寺山や男山周辺などが産地とみられている。また、石材は城周辺の山々から切り出されただけでなく、城主羽柴秀吉や池田輝政の時代には、古墳の石棺や墓石のほか、石塔類などを石垣に転用した転用石が使用されている。

おわりに

近世城郭では、壮麗、かつ個性的な大天守にどうしても目が行きがちである。しかし、石垣の積み方や形状、さらには表面加工技術や石材石質など城郭固有の特徴を知れば知るほど石垣の見どころは多様であることに気付く。その意味で石垣は、城郭のもつ本来の個性を時代的変遷とともに際立たせているともいえる。姫路城の石垣は残存状況も非常に良好で多彩な石垣を見ることができる。ぜひとも多くの方に石垣築造の歴史を視野に入れつつ、姫路城のさらなる魅力を感じ取っていただきたい。